生涯剣道への可能性についての一考察

—中学校剣道部員の意識の分析から—

A Study on the Possibility of Lifelong Kendo:
From an Analysis of Consciousness in Junior High School Kendo Club Students

浅見 裕 : Yutaka ASAMI¹

岡嶋 恒 : Tuneshi OKAJIMA²

木原 資裕 : Motohiro KIHARA³

高橋 裕子 : Yuko TAKAHASHI⁴

山神 眞一 : Shin-ichi YAMAGAMI⁵

1 岩手大学 : Iwate University, 3-18-33 Ueda, Morioka, Iwate, 020-8550

2 北海道教育大学釧路校 : Hokkaido University of Education Kushiro Campus,
1-15-55 Shiroyama, Kushiro, Hokkaido, 085-0826

3 鳴門教育大学 : Naruto University of Education,
Takashima, Naruto-cho, Naruto, Tokushima, 772-0051

4 愛知教育大学 : Aichi University of Education, 1, Hirosawa, Igaya-cho, Kariya, Aichi, 448-0001

5 香川大学 : Kagawa University, 1-1, Saiwai-cho, Takamatsu, Kagawa, 760-0016

Abstract

The purpose of the present paper is to clarify what junior high school kendo club students think about kendo, and to comprehend their desire to continue. It will also focus on the possibility of lifelong kendo. The subjects were 2302 junior high school members of kendo club. They responded to 54 questions.

The results obtained were as follows;

Junior high school kendo club students show very strong desire to win.

Nine factors were extracted in factor analysis using their answers. These factors were "affirming the effect of practice", "hatred", "desire for a widespread appeal of kendo", "demanding practice", "continuous motivation", "demanding for convention", "recognizing the value of physical ability", "rejecting of restraint", and "displeased with judging". And we analyzed the effects upon the various factors by the difference of start period in kendo and kendo record.

The groups with a high kendo record and who started kendo before admission to junior high school affirmed the effect of practice and had continuous motivation. But they were displeased with the judging in kendo.

As characterised by the difference in the kendo record, the group with a high record in kendo felt the negative image of kendo. Also, the group with a low record in kendo was concerned with the widespread appeal of kendo, conventional style and physical ability.

As characterised by the difference in start period, the group starting kendo before admission to junior high school was very interested in practical activity. The group starting kendo

after admission to junior high school was concerned with conventional style and physical ability.

The results indicate the possibility of lifelong kendo in terms of the groups with a high record and who start kendo before admission to Junior High. Furthermore, the groups who join after admission to Junior High tends to quit kendo.

I 序 論

生涯学習社会を迎え、スポーツ教育の課題として生涯スポーツへの筋道を明らかにすることの取り組みが期待されている。これまで運動部活動において積極的な参加経験者は、大人になっても運動に取り組む可能性が高いことが確認⁸⁾¹⁸⁾⁴⁰⁾されており、運動部活動と生涯スポーツの関連性に注目すべきと考える。すでに嘉戸らは、「中学時代までにスポーツ技能が高められるならば、成人期の直接的スポーツ関与の程度は高まることが推測される⁹⁾」と述べており、中学校時代までの活動内容についての綿密な検討が必要と考える。

現在、小学校時代には社会体育活動であるスポーツ少年団活動において日常的な運動活動に取り組んでいる子どもが多い。一方、中学校に入学して初めて学校内の運動部に入部することにより日常的運動活動をスタートする生徒も多く、中学校によっては入学時から部活動の全員参加を義務づけているところもある。スポーツへの技能・態度・意識（価値観）などの「核が形成されるある発達段階¹⁰⁾」を中学校時期ととらえれば、その時期における運動部員のスポーツに対する意識形成のあり方によっては、「後の各ライフ・ステージにおけるスポーツ関与の質や量を決定¹²⁾」することに大きな影響を与えるであろう。

近年、中学校剣道部員数の減少が著しいことが報告²⁰⁾されているが、青少年全体としても剣道人口の激減という状況にあり、剣道指導者はこの状況の対応に迫られている。剣道は生涯を通して稽古を実践できることを特性の一つとしている⁶⁾ことから、生涯学習社会における運動実践の一つのモデルとなりうる²⁾と考える。運動種目毎の集団の実態や内容を検討した先行研究は多数ある⁵⁾⁷⁾²⁶⁾²⁷⁾²⁸⁾³⁵⁾が、中学校の剣道部員について自分が実践している剣道に対する意識を検討したものは見当たらない。すでに高校・大学生を対象とした剣道

に対する全国的な意識調査が実施され³⁾、剣道を継続することを阻害する要因についての検討¹⁷⁾が行われているが、中学生部員については未実施のままである。

本稿では、開始時期が異なる部員が混在している中学校剣道部員の剣道に対する意識を分析し、生涯剣道に関連する意識の形成状況を把握することを目的とし、生涯剣道への可能性を検討するものである。

II 研究方法

1. 調査項目の決定

(1) 事前調査 剣道について良かったことと嫌なことを、小・中学生がどんな言葉で表現するのかを理解するための事前調査を1995年4月に実施した。実施要領は岩手・埼玉・東京・愛知・大阪・徳島の都府県の1～2道場の指導者に依頼して、「剣道をしていて『よかったな、たのしいな、うれしいな』、また『いやだな、つまらないな、問題だな』と思ったのはどんなときでしたか」という質問について、小学校5年生～中学校3年生までの年代の子どもたちに自由記述により回答させ、回収したものを指導者より筆者らに手渡してもらった。

(2) 予備調査 小・中学生の事前調査の記述により得られた項目、青年⁴⁾や高齢者²⁾に対する先行調査で用いた項目、剣道指導者としての観点から把握しておきたい項目、それに他のスポーツにおける意識調査の項目¹⁾³⁷⁾をも視野に入れ、意識を問う項目の候補を作成した。それらについては、事前調査を実施した各道場の指導者にも項目の妥当性について聞き取り調査を行い、精選した上で68項目からなる調査項目を作成した。各項目については「5-すごくそう思う、4-少しそう思う、3-どちらともいえない、2-あまりそう思わない、1-ぜんぜんそう思わない」の5段階評定尺度による

回答を求めた。

1995年7月に北海道・岩手・埼玉・東京・愛知・大阪・徳島の各地で事前調査と同様の方法により予備調査を実施した（中学生分は145名分回収）。

(3) 項目の決定 予備調査の結果に基づき、各項目における5段階頻度分布結果を検討することで

項目のさらなる精選を行い、実態把握のための13項目（学年、性別、経験年数、段級、練習場所、練習日数、練習時間、習い事の有無、家族体験者の有無、勝利・昇段のどちらを選択か、戦績、始めた理由、継続している理由）と、意識を問う54項目（表1を参照）を決定した。

表1 平均得点の比較

項 目	入学後群	標準偏差	入学前群	標準偏差	差の検定
27. もっと試合で勝ちたい	4.59	0.80	4.57	0.83	
06. 剣道では氣力がもっとも大切だ	4.18	0.93	4.18	0.96	
14. 練習が終わった時の満足度は好きだ	4.18	1.00	4.09	1.08	*
29. もっと上の級や段をとりたい	4.12	1.11	4.22	1.03	*
43. 剣道の仲間と練習以外の行事をしたい	4.07	1.12	4.08	1.10	
22. 先生の教え方はわかりやすい	4.07	0.97	4.07	1.05	
20. 新しい技を教えてもらいたい	4.04	1.06	4.03	1.09	
40. 剣道の試合は、見ていておもしろい	3.90	1.06	3.83	1.14	
12. 剣道では、体力がもっとも大切だ	3.90	0.98	3.96	1.00	
35. 試合で負けてもほめられるとやる気が出てくる	3.88	1.15	3.76	1.24	*
01. 剣道を始めてから体がじょうぶになったと思う	3.86	0.98	4.21	0.92	***
24. 剣道では、技が上手に使えることが最も大切	3.80	0.99	3.68	1.11	**
42. 試合練習は好きだ	3.73	1.16	3.85	1.17	*
51. 剣道を始めてから、友達が増えたと思う	3.72	1.22	4.16	1.10	***
03. 剣道もオリンピック種目になってほしい	3.70	1.24	3.85	1.30	**
02. 仲間とのじげいが好きだ	3.69	1.11	4.00	1.05	***
38. 防具や稽古着のよごれやにおいがいやだ	3.69	1.29	3.52	1.37	**
37. 外国にも剣道が広まってほしい	3.63	1.21	3.77	1.28	*
53. 新聞やテレビで剣道のことをもっと取り上げてほしい	3.63	1.24	3.82	1.26	***
19. 夏の稽古は暑くていやだ	3.61	1.23	3.45	1.25	**
21. 剣道以外のスポーツもやりたい	3.59	1.20	3.67	1.27	
52. 先生は剣道のすばらしさを教えてくれる	3.58	1.11	3.67	1.15	
13. 剣道の練習では、きびしさが重要だ	3.58	1.01	3.69	1.06	**
23. 剣道で学んだことはこれからの生活に役に立つ	3.54	1.13	3.77	1.12	***
28. 剣道をやっていない人にも、すすめたい	3.51	1.17	3.58	1.27	
54. お年よりと一緒に練習できるのは良いことだ	3.49	1.16	3.53	1.25	
18. 剣道を始めてから、がまん強くなったと思う	3.49	1.06	3.71	1.09	***
46. 通手になることを目指して練習をしている	3.46	1.33	3.79	1.27	***
05. 剣道の大会がもっとたくさんあるとうれしい	3.42	1.19	3.41	1.23	
47. 剣道を始めてから、礼儀正しくなったと思う	3.38	1.16	3.77	1.12	***
25. 基本練習は好きだ	3.37	1.05	3.24	1.16	**
50. まちがった審判をされてくやしかったことがある	3.36	1.47	4.18	1.20	***
31. 剣道を始めてから一つのことに気持ちが集中する	3.33	1.04	3.44	1.11	*
04. 冬の練習は寒くていやだ	3.28	1.19	3.34	1.22	
33. かた（剣道形）の練習をやりたい	3.25	1.14	3.14	1.24	*
30. 中学校または高校へ行っても、剣道を続けたい	3.24	1.25	3.69	1.30	***
16. 剣道の試合での「1本」はわかりにくい	3.20	1.16	2.58	1.24	***
17. 先生に稽古の相手をしてもらおうのが好きだ	2.97	1.15	3.13	1.17	**
15. 打たれた時の痛さがいやだ	2.94	1.27	2.66	1.29	***
49. 試合に負けた時、おこられるのがいやだ	2.94	1.27	3.12	1.31	**
41. 剣道に時間をとられてやりたいことができない	2.87	1.21	2.91	1.22	
08. 試合でも声援やたいこにのぎやかな応援をしたい	2.87	1.35	2.68	1.40	***
39. 剣道の教え（心がまえなど）は難しくわからない	2.84	0.97	2.66	1.07	***
48. 大人になっても、剣道を続けたい	2.76	1.22	3.23	1.33	***
26. 練習の時間が長すぎる	2.73	1.09	2.66	1.14	
07. 1週間の練習日が多すぎる	2.69	1.24	2.61	1.22	
34. いつも同じ練習をくりかえすのはいやだ	2.67	1.12	2.73	1.20	
45. かかり稽古は好きだ	2.55	1.22	2.58	1.19	
10. 正座や黙想がすきだ	2.54	1.06	2.35	1.08	***
44. 男子と女子とで、練習の中身は違う方がよい	2.47	1.27	2.45	1.24	
36. 剣道の先生は、堅苦しい	2.41	1.11	2.42	1.19	
09. 剣道を始めてから学校の勉強の成績がよくなった	2.30	1.03	2.42	1.10	*
32. 今なんとなく剣道に興味がなくやる気が起きない	2.22	1.09	2.26	1.14	
11. 私も剣道の先生になりたい	2.20	1.04	2.65	1.25	***

*=p<0.05 **=p<0.01 ***=p<0.001

2. データ収集と処理

(1) 対象者と調査実施方法 中学校剣道部には、同学年の中に中学校入学前に既に練習経験や戦績を持っている者もいれば、入学後に開始した初心者者が混在している状況である。また、県大会の試合で上位にあがる強豪学校と、県大会にも出られない競技力の低い学校では、練習の取り組み方も違い、必然的に部員の意識も違っていると考えた。

本調査は1995年10月に実施された。まず筆者らから全国中体連剣道専門部の各都道府県委員長あてに調査用紙を郵送し、各委員長は各都道府県大会準決勝進出の上位4校から2校および県大会にも出場できなかった戦績下位群から4校の計6校

の中学校を任意に抽出し、各校毎に10名分の調査用紙を配付した。各校においては剣道部顧問教諭により抽出(学年不問、男女不問)された剣道部員が回答した。顧問教諭から香川大学宛に郵送にて返送してもらう方法により回収した。回収数は2,322名(回収率82.3%)であった。

(2) データ処理 回収したデータのうち有効回答者数2,302名について、54項目毎の「5-すごく思う、～1-ぜんぜんそう思わない」の回答にそれぞれ5～1点を与え、鳴門教育大学情報処理センターのCONVEX C3Jを用いて統計パッケージSPSSXにより統計処理を行った。

(3) 対象者の分類と解析方法 本稿では、中学校

表2 因子負荷行列と因子の解釈

項 目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	F9	共通性	因子の解釈
23. 剣道で学んだことはこれからの生活に役に立つ	0.676	-0.089	0.187	0.105	0.132	0.047	0.033	-0.033	0.066	0.536	実践効果肯定
47. 剣道を始めてから、礼儀正しくなったと思う	0.623	-0.079	0.116	0.030	0.016	0.148	0.028	0.058	0.276	0.512	
22. 先生の教え方はわかりやすい	0.611	-0.082	0.147	0.097	0.035	-0.080	0.095	-0.209	-0.125	0.487	
52. 先生は剣道のすばらしさを教えてくれる	0.609	-0.063	0.280	0.072	0.169	0.015	0.048	-0.178	-0.016	0.521	
18. 剣道を始めてから、がまん強くなったと思う	0.603	-0.133	0.004	0.145	-0.046	0.120	0.100	0.138	0.174	0.479	
31. 剣道を始めてから一つのことに気持が集中する	0.538	-0.163	0.088	0.070	0.165	0.189	-0.027	0.154	0.157	0.441	
01. 剣道を始めてから体がじょうぶになったと思う	0.490	-0.085	0.084	0.160	0.089	-0.056	0.075	0.205	0.208	0.382	
14. 練習が終わった時の満足感は好きだ	0.467	-0.006	0.212	0.178	-0.010	0.124	0.023	-0.034	-0.124	0.327	
13. 剣道の練習では、きびしさが必要だ	0.454	-0.114	0.079	0.194	0.156	0.094	0.238	-0.248	-0.050	0.417	
17. 先生に稽古の相手をしてもらうのが好きだ	0.407	-0.206	0.027	0.385	0.203	0.315	-0.033	-0.207	-0.051	0.543	
19. 夏の稽古は暑くていやだ	0.005	0.615	-0.029	-0.178	-0.104	-0.235	0.025	-0.040	-0.078	0.484	嫌 悪
38. 防具や稽古着のよごれやにおいがいやだ	-0.100	0.611	-0.006	-0.008	-0.114	-0.102	0.066	0.005	-0.004	0.412	
04. 冬の練習は寒くていやだ	-0.020	0.574	-0.037	-0.124	-0.054	-0.288	0.018	0.036	-0.002	0.434	
15. 打たれた時の痛さがいやだ	-0.168	0.568	-0.092	-0.077	-0.024	0.126	0.114	-0.014	-0.121	0.409	
49. 試合に負けた時、おこられるのがいやだ	-0.110	0.562	0.010	-0.053	-0.022	0.065	-0.012	0.070	0.240	0.399	
41. 剣道に時間をとられてやりたいことができない	-0.053	0.525	-0.088	-0.144	-0.117	-0.027	-0.045	0.379	0.093	0.475	普及願望
01. 剣道の教え(心がまえなど)は難しくわからない	-0.097	0.488	-0.037	0.060	0.039	-0.004	-0.125	0.140	-0.342	0.406	
37. 外国にも剣道が広まってほしい	0.131	-0.010	0.737	0.157	0.027	0.117	-0.035	-0.006	0.027	0.602	
03. 剣道もオリンピック種目になってほしい	0.199	-0.091	0.636	0.249	0.185	0.003	0.028	0.059	0.016	0.554	
53. 新聞やテレビで剣道のことをもっと取り上げてほしい	0.370	-0.035	0.632	0.149	0.211	0.045	0.038	-0.037	0.072	0.614	
28. 剣道をやっていない人にも、すすめたい	0.230	-0.134	0.565	0.053	0.129	0.089	0.170	0.101	0.035	0.457	実戦練習志向
54. お年よりと一緒に練習できるのは良いことだ	0.376	-0.086	0.401	0.004	0.099	0.327	-0.012	-0.151	0.055	0.453	
42. 試合練習は好きだ	0.157	-0.154	0.192	0.672	0.070	0.017	0.095	0.047	0.056	0.556	
02. 仲間とのじびいのが好きだ	0.279	-0.112	0.109	0.653	0.073	-0.001	-0.036	-0.035	0.125	0.552	
05. 剣道の大会がもっとたくさんあるとうれしい	0.084	-0.174	0.259	0.578	0.222	0.096	0.125	-0.025	-0.020	0.513	
20. 新しい技を教えてもらいたい	0.122	0.016	0.293	0.445	-0.063	0.082	0.328	-0.024	0.101	0.428	継続意欲
48. 大人になっても、剣道を続けたい	0.270	-0.170	0.240	0.275	0.668	0.124	0.027	-0.145	0.140	0.738	
30. 中学校または高校へ行っても、剣道を続けたい	0.233	-0.176	0.234	0.299	0.650	0.067	0.089	-0.156	0.120	0.703	
11. 私も剣道の先生になりたい	0.255	-0.104	0.190	0.225	0.634	0.176	0.059	-0.027	0.154	0.623	
21. 剣道以外のスポーツもやりたい	0.031	0.366	-0.089	0.163	-0.417	0.078	-0.056	0.094	0.103	0.371	
33. かた(剣道形)の練習をやりたい	-0.003	0.027	0.218	0.038	-0.094	0.671	0.153	0.023	0.128	0.549	伝統様式志向
10. 正座や黙想がすきだ	0.245	-0.131	0.099	-0.022	0.185	0.571	0.025	0.182	-0.137	0.501	
45. かかり稽古は好きだ	0.167	-0.186	-0.015	0.252	0.158	0.502	-0.012	-0.204	-0.153	0.568	
24. 剣道では、技が上手に使えることが最も大切	0.042	0.048	0.052	0.126	-0.019	0.050	0.736	0.045	-0.067	0.574	
12. 剣道では、体力がもっとも大切だ	0.194	0.055	0.019	0.017	0.105	0.056	0.735	0.052	0.012	0.599	
08. 試合でも声援やたいこのにぎやかな応援をしたい	0.104	0.103	0.118	0.109	-0.074	0.023	0.134	0.584	-0.234	0.467	拘束反発
07. 退団の練習日が多すぎる	-0.098	0.472	-0.084	-0.280	-0.146	-0.059	0.027	0.487	0.040	0.583	
26. 練習の時間が長すぎる	-0.090	0.472	-0.099	-0.296	-0.111	-0.059	0.020	0.478	0.035	0.574	
50. まちがった審判をされてくやしかったことがある	0.135	0.216	0.038	0.194	0.057	-0.007	-0.073	0.003	0.605	0.479	
16. 剣道の試合での「1本」はわかりにくい	-0.090	0.355	-0.022	0.005	-0.119	0.173	-0.016	0.020	-0.503	0.433	
平方和	4.612	3.571	2.964	2.731	2.124	1.869	1.706	1.703	1.553		
寄与率	9.81	7.60	6.31	5.81	4.52	3.98	3.63	3.62	3.30		

部員たちを中学校入学前から開始（以後、入学前と略す）した群と、中学校入学後に開始（以後、入学後と略す）した群という「開始時期」により分類し、各質問項目の平均得点をT検定により比較した。また、因子分析により因子の命名・解釈を行った。さらに開始時期と戦績の違い（県大会準決勝に勝ち進んだ体験を持つ高戦績群＝761名と県大会にも出場できなかった低戦績群＝1,541名との2群に分類）の2要因の各因子への影響の有無を確かめるために、因子得点を算出し、二元配置分散分析を用いて比較検討した。

Ⅲ 結 果

1. 開始時期の相違による平均得点の差

（以下の文中では、項目名は略称で記す）

回答時の学年と経験年数とのクロス集計結果から、入学後群（775名）と入学前群（1,527名）の2群に分類し、54項目についての平均得点と、両群の差についてのT検定の結果を表1に示した。表1では入学後群の高位順に上から並べてある。

両群について、平均得点の差の検定を行ったところ、統計的に有意な差が認められた項目数は、0.1%水準で17項目、1%水準で8項目、5%水準で8項目の合計33項目となり、開始時期の違いは意識に相違を生んでいるようである。とくに0.1%水準の17項目の中でも、「50. 誤審くやしい」においては、両群間で平均得点が0.82という最大の開きが見られた。

両群に有意な差は認められなかったが、他の項目より突出して高得点（肯定していた）なのは、「27. もっと試合で勝ちたい」であった。

2. 因子分析

54項目の項目のうち、回答傾向に偏りがあった7項目を除去した47項目について主成分分析をおこない、因子数の決定は固有値1.0以上のものを対象とし、9個の因子を抽出した³²⁾³³⁾³⁶⁾。バリマックス回転後の因子負荷量0.40以上の項目により、表2のように因子を解釈した。

第1因子は、「23. 生活に役立つ」「47. 礼儀正しくなった」「22. 先生教え方わかりやすい」「52. 素晴らしさを教えてくれる」「18. 我慢強くなっ

た」など、指導者のもとで実践することで得られる効果の項目からなり、実践から得られた効果を肯定する因子として、「実践効果肯定」と命名した。

第2因子では、「19. 暑くていや」「38. 汚れにいいや」「4. 寒くていや」「15. 痛さがいや」「49. おこられるのがいや」など、「いやだ」という表現の項目の因子負荷量が高く、剣道に対して否定的な感情につながり、「嫌悪」と命名した。

第3因子では、「37. 外国にも広まってほしい」「3. オリンピック種目になってほしい」「53. マスコミ取り上げ方」「28. やることをすすめたい」などの普及を願う項目からなり、「普及願望」と命名した。

第4因子は、「42. 試合練習は好き」「2. 仲間と地稽古好き」「5. 大会たくさん」「20. 新技を教えて」の項目からなり、相互に攻防の技術を自由に発揮する場を好む傾向がうかがわれ、「実戦練習志向」と命名した。

第5因子は、「48. 大人でも続けたい」「30. 進学後続けたい」「11. 先生になりたい」「21. 剣道以外のスポーツ（マイナス点）」の将来における剣道を継続する意欲を表す項目からなり、「継続意欲」と命名した。

第6因子は、「33. 形をやりたい」「10. 正座黙想好き」「45. かかり稽古好き」という剣道独特の練習様式をあらわす項目からなり、「伝統様式志向」と命名した。

第7因子は、「24. 技が大切」「12. 体力が大切」の2項目からなり、剣道を行う上で必要な身体的能力についての項目であるので「身体的能力認識」と命名した。

第8因子は、「8. にぎやかな応援したい」「7. 練習日が多すぎる」「26. 練習時間が長すぎる」の3項目からなり、剣道の試合では応援は拍手のみと規制されており、また練習時間内は行動を拘束されていることでもあり、「拘束反発」と命名した。

第9因子は、「50. 誤審くやしい」「16. 一本わかりにくい（マイナス点）」の2項目からなり、自分は一本をとったと思っても、審判には採用されなかったことの悔しさがうかがえ、「審判不満」と命名した。

3. 各因子毎の要因の影響

開始時期と戦績の違いの2要因の各因子への影響の有無を確かめるために、各因子毎に入学前群と入学後群、高戦績群と低戦績群のそれぞれの水準について因子得点を算出し、二元配置分散分析を用いた(表3参照)。その際、交互作用が認められた因子については、開始時期と戦績の2要因のそれぞれ2つの群をクロスさせて形成された4群をSCHEFFEの方法による多重比較を行った。交互作用が認められなかった因子については、要因の主効果を検討し、主効果が有意であった要因については水準間で平均因子得点を比較した³⁴⁾。

実践効果肯定因子では交互作用がなく、開始時期と戦績の主効果を検討したところ、開始時期は5%水準で、戦績は0.1%水準で有意であった。それぞれの平均因子得点を見ると、高戦績群(0.257)が低戦績群(-0.112)よりも高く、入学前群(0.063)が入学後群(-0.106)よりも高かった。すなわち、高戦績であることと、入学前から開始していることが、実践してきた剣道の効果を肯定することに影響していた。

嫌悪因子では交互作用がなく、戦績だけが有意であった。平均因子得点を見ると、高戦績群(0.078)が低戦績群(-0.032)よりも高かった。すなわち、高戦績であることが剣道に嫌悪を感じることに影響していた。

普及願望因子では交互作用がなく、戦績だけが有意であった。平均因子得点を見ると、低戦績群

(0.049)が高戦績群(-0.094)よりも高かった。すなわち、低戦績であることが剣道の普及を願うことに影響していた。

実戦練習志向では交互作用がなく、開始時期だけが有意であった。平均因子得点を見ると、入学前群(0.044)が入学後群(-0.081)よりも高かった。すなわち、入学前の早い時期から剣道を開始していると試合や互角稽古のような実戦の様式の剣道の練習をやりたいことに影響していた。

継続意欲因子では交互作用があったため、2つの要因の主効果を検討するのではなく、入学前・高戦績(県大会上位4校進出)群(578名)、入学後・高戦績群(183名)、入学後・低戦績(県大会上位4校未進出)群(601名)、入学前・低戦績群(940名)の4群に分類して、各群の平均因子得点について多重比較を行った(図1参照)。

それぞれの群の因子得点では、入学前・高戦績群(0.298)がもっとも高く、他の3群のいずれとも統計的に有意な差が認められた。また、入学前・低戦績群(0.009)は入学後・低戦績群(-0.238)とも有意な差が認められたが、入学後・高戦績群(-0.148)とは有意な差は認められなかった。これらのことからすると、入学前の早い時期から開始し、かつ、高戦績の者のみが継続意欲がとくに高かった。一方、入学後群は戦績に関わらず剣道を継続することに否定的であった。

伝統様式志向因子では交互作用がなく、開始時期は5%水準で、戦績は0.1%水準で有意であっ

表3 各因子の因子得点の分散分析表

第1因子(実践効果肯定)				
要因	平方和	自由度	F 比	
戦績	59.87	1	62.19	***
開始時期	6.22	1	6.46	*
交互作用	0.28	1	0.29	

第2因子(嫌悪)				
要因	平方和	自由度	F 比	
戦績	6.25	1	6.33	*
開始時期	6.22	1	6.46	
交互作用	0.46	1	0.47	

第3因子(普及願望)				
要因	平方和	自由度	F 比	
戦績	7.73	1	7.74	**
開始時期	3.72	1	3.72	
交互作用	0.17	1	0.17	

第4因子(実戦練習志向)				
要因	平方和	自由度	F 比	
戦績	2.39	1	2.40	
開始時期	7.75	1	7.80	**
交互作用	3.30	1	3.32	

第5因子(継続意欲)				
要因	平方和	自由度	F 比	
戦績	26.19	1	27.08	***
開始時期	43.19	1	44.65	***
交互作用	3.72	1	3.85	*

第6因子(伝統様式志向)				
要因	平方和	自由度	F 比	
戦績	55.18	1	57.01	***
開始時期	6.14	1	6.34	*
交互作用	0.75	1	0.78	

第7因子(身体的能力認識)				
要因	平方和	自由度	F 比	
戦績	6.12	1	6.19	*
開始時期	5.17	1	5.23	*
交互作用	2.15	1	2.17	

第8因子(拘束反発)				
要因	平方和	自由度	F 比	
戦績	1.49	1	1.50	
開始時期	0.03	1	0.03	
交互作用	1.70	1	1.72	

第9因子(審判不満)				
要因	平方和	自由度	F 比	
戦績	14.41	1	16.91	***
開始時期	279.58	1	327.92	***
交互作用	1.35	1	1.58	

(* = $P < 0.05$, ** = $P < 0.01$, *** = $P < 0.001$)

た。それぞれの平均因子得点を見ると、低戦績群(0.111)が高戦績群(-0.249)よりも高く、入学後群(0.106)が入学前群(-0.054)よりも高かった。すなわち、低戦績であることと入学後から開始していることが、伝統的な剣道の様式に関心をよせることに影響していた。

身体的能力認識因子では交互作用がなく、開始時期、戦績ともに5%水準で有意であった。それぞれの平均因子得点を見ると、低戦績群(0.042)が高戦績群(-0.092)よりも高く、入学後群(0.074)が入学前群(-0.039)よりも高かった。すなわち、低戦績であることと入学後から開始していることが、剣道では身体的能力を大切に思うことに影響していた。

拘束反発因子では交互作用がなく、また開始時期と戦績の主効果も有意でなかったことから、要因による影響の相違は認められなかった。

審判不満因子では交互作用がなく、開始時期、戦績ともに0.1%水準で有意であった。それぞれの平均因子得点を見ると、高戦績群(0.203)が低戦績群(-0.094)よりも高く、入学前群(0.270)が入学後群(-0.522)よりも高かった。すなわち、高戦績であることと、入学前から開始していることが、審判に対する不満を持つことに影響していた。

IV 考 察

1. 平均得点の結果について

経験の長い入学前群の方が誤審への不満をとく

因子得点 -0.6 -0.5 -0.4 -0.3 -0.2 -0.1 0 0.1 0.2 0.3 0.4 0.5 0.6

第5因子
継続意欲

* : $P < 0.05$

□ 入学前・高戦績群(578名)
■ 入学後・高戦績群(183名)
▨ 入学後・低戦績群(601名)
≡ 入学前・低戦績群(940名)

図1 継続意欲因子の因子得点

に強く感じていた。少年期の認識の発達特性から、大人から価値規範が強制される場合には「強い反発を示すことはあっても、自分自身で確信したことに対しては、きわめて忠実であろうとする³⁰⁾」ことや、自己本位的な人格³¹⁾の影響もあると思われる。しかし、そればかりではなく、入学前群は小学校時代においてスポーツ少年団などの活動を経験し、入学後群よりも試合経験を多く持っている。それらの試合の中で、自分の打ちを一本と認めてくれない場合とか、自分は打たれていないと思っているのに相手に一本が与えられた体験が多くなっていることが原因と考えられる。

また、入学前・後の両群とも「試合で勝ちたい」思いが非常に強く、中学校剣道部員の意識には勝利欲求の意識が強烈である。小椋らは中学生のサンプルの単純集計結果から、へたな方より「うまいの方が、勝利を重視する傾向にある³²⁾」と報告しているが、ここでは経験の短い入学後群の方が得点が高いが、統計的に有意な差は認められず、どちらも勝利欲求を強く意識していることになる。

これらのことから、誤審への不満の強さと勝利欲求の強さが重複している入学前群には、勝つことに重点を置くスポーツ態度¹⁴⁾が形成されていることがうかがえる。

2. 因子分析による因子への2要因の影響について

高戦績であることと、入学前から開始していることが、実践効果肯定因子と審判不満因子とに影響していた。

入学前ということは小学生時代から剣道に取り

組んでおり、その時代には指導者により練習内容を指示されたり、一緒に剣道具をつけて相手をしてもらったりして練習しているのが実態である。その鍛えられた体験を土台として持ち、中学校で練習を積み重ねて勝利の心地よさを体験できたのが高戦績群である。その勝利体験があるからこそ指導者を信頼し、実践しての効果についても肯定していると考ええる。中学生剣道部員は勝利体験の有無、すなわち「結果としての競技力¹⁶⁾」で指導者の働きかけや効果について評価しているとも言える。

また、早期に開始し鍛えられたことと、試合で勝ち上がっていきける力量をつけたということは、試合の体験の多さを物語っている。前項で論じたように、多くの試合を体験することで、誤審に遭遇する機会が多くなり、不満を感じずとすれば、自分に不利な判定があった場合である。ここにも勝つことを重視する意識の影響が表れている。

嫌悪因子では高戦績であることが関係している。高戦績群ほど「苦しくつらい練習が常態であり、部員を試練にかけ、それに耐えられた者に選手の栄誉を与える²⁰⁾」というスポーツエリート²¹⁾の選抜システムに組み込まれて部活動に取り組んでおり、この苦しくつらい練習に耐える中で、剣道の嫌な面に直面する機会が多くなるのであろう。上述のように高戦績は剣道に肯定的な意識を持つ反面、嫌悪意識とも関連しているとなると、試合に勝たせようとするだけの指導では不十分であることを示唆している。

普及願望因子では、低戦績群が高戦績群よりも普及を願っている結果であった。開始時期、すなわち体験の長短は影響していなかったことになる。低戦績群は県大会規模の試合には出られないレベルの中学生部員であり、対外試合も少なく、自分たちの近辺の者たちだけとの交流にとどまっている。より広く、多くの同好の人達との交流の思いが強く現れた結果と考える。

実戦練習志向因子では、入学前群が志向していた結果であった。すでに小学生時代から剣道の練習に慣れ親しんできたことから、動作を規制される基礎的な稽古よりも、自分の技能を自由に駆使・発揮したい思いが強いことの表れと考える。

この反面、伝統様式志向因子と身体的能力認識

因子では、低戦績であることと入学後から開始していることが影響していた。これは不慣れで技能レベルが低い段階では、勝敗を競い合うレベルに至らず、剣道のもつ伝統的な作法や練習方式に馴染むことに取り組まざるをえないという活動の実態に応じた意識形成がなされていると考える。また、これらの群は試合に出場できた場合でも、相手の技の多彩さや動きの速さについていけずに負けることが多い。この体験から、自分たちの技能レベルでは体力が劣っており、技を上手に使いこなせないから負けてしまうと思い、勝利を得るためには身体的能力が大切であると感じているものと考ええる。

拘束反発因子では、開始時期も戦績も影響の相違は認められなかった。誰でも同様に反発しているのである。中学校の部活動では参加を義務づけている場合もあるが、剣道漬け²²⁾を強制されることは反発を招きかねない。この因子は剣道部活動に対する批判の表れであり、中学校剣道部員の誰もが批判の意識を保持していることになる。部活漬けは「燃え尽き」の基盤となるとの指摘²³⁾もあり、剣道部離れを誘発する可能性を誰もが持っていることになる。

「継続意欲」因子では、戦績ではなく開始時期の違いにより肯定と否定とに分かれ、とくに入学前・高戦績群が他の3群より抜きん出て肯定していた。

嘉戸らは「スポーツへの動機づけが早い時期になされるならば、成人期の直接的スポーツ関与の程度は高まる¹³⁾」と推測しているが、入学前群はこの推測を裏付けるような結果である。入学後群は入学前群よりも低いというだけではなく、とくに大人になった場合の継続意欲は否定傾向（「48.大人になっても継続」平均得点2.76）と言えるほど落ち込んでいる。剣道の場合、「早い時期」とは小学校期以前を指すことになり、中学校入学後に部活動への参加を促しても、現状では入学前群と同じレベルの継続意欲には達しておらず、入学後群を生涯剣道に導くのは容易ではない。

水内は「中学での部活のやりすぎの反動として高校・大学での部活離れや『燃えつき症候群』もよく指摘される²²⁾」と述べている。しかし、強豪学校の練習に明け暮れ、剣道漬け状態と思われる

入学前・高戦績群であっても継続意欲は強く、部活離れに直結するような意識を形成しているわけではない。しかし、高戦績であっても入学後群は否定しており、水内の指摘する高校・大学での部活離れの可能性は高いと言えよう。

一方、入学後・低戦績群の方は、剣道を継続したくないという思いが明確である。『弱者』のレッテルを貼られ、スポーツへ再挑戦する意欲さえ阻害¹⁶⁾されているとも考えられる。武藤は「勝つこと、強いことが正義で、負けること、弱いことは無価値だとする考え方がしだいにチーム内、子どもたちの心の中に支配的となる²⁰⁾」と述べているが、剣道部員についても「負けること、弱いこと」を自覚してしまうと、自分のやっていることを無価値ととらえ、継続する意欲が育たないと考える。

「過去にスポーツ技能を高めておくことは後のスポーツ関与に有利な影響を及ぼす¹⁹⁾」からと言って、勝たせることを目指して指導すればよいのであろうか。勝つことに強い関心を持つだけでは、増山の指摘する「一方にエリートをつくと同時に、他方にいつになっても試合に出られない『落ちこぼし』を生み出す傾向²¹⁾」は変わらず、落ちこぼされたレベルの者は、たとえ「種目自体の魅力とその部での人間関係に憧れて入部²⁰⁾」したとしても、中村の指摘する「メダル獲得主義の非人間性²⁴⁾」、すなわち『使い捨て』の論理²⁵⁾」を知ることになれば、やめなくなるのは当然のことである。

勝利体験が剣道継続の意欲に大きな影響を与えるといっても、勝者となれる者は少数であり、誰もが優勝を体験できるわけではない。また、高戦績群であっても入学後群は継続の意欲については否定的である。したがって、勝利を追求することを部活動の一律的な目標としても、部員全員に継続の意欲を形成することには成功しないことになる。勝つことのみを目標にしたままでは、「トランスファーし、ドロップアウト²⁵⁾」する者が絶えることはないであろう。

筆者らは中学校の部活動段階では、勝利を追求するだけでなく、近藤の言う「仲間同士の自主的な活動を通して、各自の自己実現と民主的な行動様式の下地²⁰⁾」を作り、種目の特性を味わうため

の入口段階と考える。この段階では、多様な面白さを体験させ、そこから生涯剣道へと継続させるのが望ましいとも考えている。もし、現状のままに推移していけば、剣道は小学校時代からの経験がないと、続けようとは思わない運動となってしまう。すると剣道は、誰もが気楽にいつからでも取り組める生涯スポーツではなく、小さい頃から続けてきた限られた者だけの生涯剣道になってしまうことになる。

V 結 語

中学校剣道部員全体の剣道に対する意識の特徴としては、試合に勝ちたい思いが非常に強いことである。中でも入学前群には、勝つことに重点を置くスポーツ態度が形成されていると言える。

中学校剣道部構成員の多様性を考慮し、剣道の開始時期の違いと戦績の違いが意識に影響を及ぼしているかについて、因子分析による9因子（実践効果肯定因子、嫌悪因子、普及願望因子、実戦練習志向因子、継続意欲因子、伝統様式志向因子、身体的能力認識因子、拘束反発因子、審判不満因子）の因子得点をもとに比較検討をした。

その結果、高戦績であり入学前から開始していることは、剣道実践効果を肯定するが、審判への不満も強いことが認められた。また、戦績の相違では、高戦績であることは嫌悪因子に影響しており、低戦績であることは、普及願望、伝統様式志向、身体的能力認識の4因子に影響が認められた。開始時期の相違では、入学前から開始していることが影響していたのは実戦練習志向因子であり、入学後から開始したことは伝統様式志向、身体的能力認識の2因子に影響していた。

将来の剣道人口の増減に直結するであろう継続意欲については、中学校剣道部員には問題点があることが明らかになった。現状では入学前・高戦績群には継続意欲が他の群よりも強いことが確認できたが、入学後に初心者として剣道を始めた部員は、戦績にかかわらず継続意欲が低かった。中学校の部活動体験のみでは生涯剣道へ導くことが困難となっていることになる。

中学校剣道部員には試合での勝利欲求の意識が強いからと言って、試合結果を重視するだけの部

活動では、中学校入学後に剣道を始めた部員はいつかはやめてしまいかねない。現状の中学校剣道部員の意識から将来の剣道の姿を予想すると、小さいころから継続している一部の強者だけしか実践できない「生涯剣道」となりかねない。

中学校入学後に剣道を始めた部員が、卒業後も継続したくなるように指導の改善が必要である。まずは部活動の目標の見直しと、初心者段階の部員の練習内容の改善が急務のことである。

本研究の一部は、全日本剣道連盟より助成を受けて行われたものであり、本稿は日本スポーツ教育学会第16回大会で発表した内容を修正加筆したものである。

本研究を進めるにあたり、全国中体連剣道専門部および全国教育系大学剣道連盟のご協力をいただきました。ここに謝意を表します。

文 献

- 1) 天野彰夫・筒井清次郎 (1990年), サッカーの楽しさに関する研究. 愛知教育大学教科教育センター研究報告: 第14号, pp.211-220.
- 2) 浅見裕・木原資裕・山神眞一・高橋裕子・大塚忠義 (1996年), 高齢の剣道愛好者の剣道観について—青年との比較から—. 武道学研究: 第29巻第2号, p.15.
- 3) 浅見裕・岡嶋恒 (1997年), 徹底調査◆少年剣士たちの想い. 剣道日本: 第22巻第1号, p.31.
- 4) 浅見裕・太田順康・大塚忠義・木原資裕・草間益良夫・山神眞一 (1995年), 現代青年の剣道観についての研究—剣道人口減少問題に関連して—. 武道学研究: 第27巻第2号, pp.8-17.
- 5) 藤田千鶴子 (1974年), 中学校における必修クラブと運動部にみられる地域差について—とくに活動志向型と指導型に関連して—. 体育社会学会編, 体育とスポーツ集団の社会学. 道和書院: 東京, pp.181-203.
- 6) 今井三郎 (1976年), 幼少年剣道の指導と研究. 体育とスポーツ出版社: 東京, p.19.
- 7) 伊與田康雄 (1992年), スポーツ教育と課外活動をめぐる問題. スポーツ教育学研究: 第20特別号. pp.33-40.
- 8) 嘉戸脩 (1974年), 運動クラブの運動欲求変容機能に関する一考察—社会人の運動・スポーツ活動との関連から—. 体育社会学会編, 体育社会学研究 3 体育とスポーツ集団の社会学. 道和書院: 東京, p.156.
- 9) 嘉戸脩・永島惇正・川辺光・萩原美代子・加藤爽子 (1977年), 直接的スポーツ関与の分析とその要因に関する研究. 体育社会学会編, 体育社会学研究 6 スポーツ参与の社会学. 道和書院: 東京, p.50.
- 10) 同上書. p.53.
- 11) 同上書. p.49.
- 12) 同上書. p.50.
- 13) 同上書. p.41.
- 14) 影山健 (1987年) 子どものスポーツの問題点. 体育・スポーツ社会学会編, 体育・スポーツ社会学研究 6 子どものスポーツを考える. 道和書院: 東京, p.10.
- 15) 同上書. p.12.
- 16) 片岡暁夫 (1988年), 学校運動部の教育性と競技性. 学校体育: 第41巻第11号, p.26.
- 17) 木原資裕・浅見裕・大塚忠義・松村司朗・横山直也・草間益良夫・山神眞一・境英俊・太田順康 (1995年), 剣道実践にともなう阻害要因の検討—経験年数による違いを中心に—. 武道学研究: 第28巻第1号, pp.33-46.
- 18) 小椋博・影山健 (1978年), 労働要因がスポーツ参与に及ぼす影響の分析—重回帰モデルによる計量的分析—. 体育学研究: 第22巻第5号, p.318.
- 19) 小椋博・森川貞夫・枝村亮一 (1977年), スポーツに対する態度, 特に勝利志向の分析—「スポーツへの社会化」に関する国際調査から—. 体育社会学会編, 体育社会学研究 6 スポーツ参与の社会学. 道和書院: 東京, p.62.
- 20) 近藤義忠 (1988年), これからの社会と部活動のあり方. 学校体育: 第41巻第11号, p.16.
- 21) 増山均 (1992年), 学校五日制と少年スポーツ. 体育科教育: 第40巻第10号, p.12.
- 22) 水内宏 (1991年), 子どもたちのすこやかな発達と部活. 城丸章夫・水内宏編, スポーツ部活はいま. 青木書店: 東京, p.30.
- 23) 武藤芳照 (1989年), 子どものスポーツ. 東京

- 大学出版会：東京，p.85.
- 24) 中村敏雄（1995年），日本のスポーツ環境批判. 大修館書店：東京，p.99.
- 25) 同上書. p.95.
- 26) 丹羽劭昭・金子洋子（1983年），大学運動部員の態度からみたスポーツの文化的特徴－特に規範を中心に－. 体育社会学研究会編，体育・スポーツ社会学研究 2. 道和書院：東京，pp. 1-23.
- 27) 丹羽劭昭・長沢邦子・北田明子（1985年），女子剣道選手の精神的特性－不安傾向やあがりを中心に－. スポーツ教育学研究：第4巻第2号，pp.101-111.
- 28) 丹羽劭昭・岡仁詩・黒田公子・蔦川譲・林昌一郎（1992年），戦績の強さからみたラグビー部の権限構造と集団魅力. 体育学研究：第37巻第1号，p.30.
- 29) 佐伯聰夫（1990年），生涯スポーツ時代の運動部活動.『体育科教育』：第38巻第9号，p.14.
- 30) 坂元忠芳（1979年），少年期における発達の特徴と教育. 子どもの発達と教育 5：岩波書店，東京，p.26。
- 31) 同上書. p.48.
- 32) 芝祐順（1981年），因子分析法第2版. 東京大学出版会：東京，pp.77-79.
- 33) 田中敏（1996年），実践心理データ解析－問題の発想・データ処理・論文の作成. 新曜社：東京，p.116.
- 34) 同上書. p.236.
- 35) 種村紀代子・丹羽劭昭（1980年），スポーツ教室参加児童のパーソナリティの検討. 体育学研究：第25巻第1号，pp.1-11.
- 36) 垂水共之・西脇二・石田千代子・小野寺孝義（1990年），新版SPSSX II 解析編 1. 東洋経済新報社：東京，pp.82-116.
- 37) 筒井清次郎・天野彰夫（1991年），鉄棒運動の楽しさに関する研究. 愛知教育大学研究報告：第40号，pp.47-57.
- 38) 内海和雄（1992年），頑張れ！スポーツ部活. 体育科教育：第40巻第10号，p.23.
- 39) 脇本三千雄（1994年），中学校の剣道部員が減少している. 剣窓：第150号，pp.15-16.
- 40) 山口康雄（1988年），生涯スポーツからみた部活動のあり方. 学校体育：第41巻第11号，p.30.

平成9年3月21日受理